

陸中・山田湾におけるパブリック・アーケオロジーの実践 と縄文三陸津波研究

齋藤 瑞穂・五十嵐 聰江・宅間 清公・
安井 健一・鈴木 正博・齋藤 弘道

1. はじめに

3・11 東日本大震災の被災状況に接し、現地支援の機会を窺う目的で岩手県山田町を訪れ、海藻標本資料のレスキュー支援に加わった 2011 年 10 月以来、発表者らは修復した海藻標本や残った歴史資料等を未来に向けて継承する「復興のパブリック・アーケオロジー」を模索してきた。山田町教育委員会の川向聖子氏にはお忙しい中にあって時間を度々頂戴し、また同町で歴史に親しむ山田史談会、大浦仮設住宅の漁師の方々、そして北浜老人クラブと「顔と顔を会わせた交流会」を進めていくなかで、幾度も災害に直面し、都度克服していく先史社会の津波復興史を解明する重要なフィールドとの気付きを得、また過去の災害を市民とともに学び伝え合う防災・減災意識の重要性を痛感したのである（齋藤 2013、五十嵐・齋藤 2015）。

考古学として、災害克服の人類史を探求するには、地震や津波という「自然現象」の把握とともに、それらにより発生した「社会現象」としての災害を射程に入れる必要がある（保立 2016）。遺跡という形で存在が判明した過去の人類の痕跡のうち、どれが災害に直面した人たちの痕跡なのか、どれが災害を克服した人たちの痕跡なのか、を広域連鎖における同時性を導出する時間軸特定方法の確立を目指して接近することが先決であるという方針をたて、発表者らは山田湾の風土に学び、復興のあるべき姿を模索する中で縄文三陸津波研究に行き着いた。現在までの道行きを紹介したい。

2. 陸中・山田湾をフィールドとするパブリック・アーケオロジーの実践

被災地との継続的な交流を進める仕掛けとして 2012 年 8 月に山田町で「山田湾まるごとスクール」（馬場小室山遺跡に学ぶ市民フォーラム／新潟大学災害・復興科学研究所／NPO 野外調査研究所の有志により構成）の開校を初動とし、一般からも参加者を募り、山田町生涯学習課のご協力を得て、被災地の文化と被災実態等何でも知り学ぶ事業を立ち上げた。発表者らは「山田湾まるごとスクール」で山田湾の自然と文化の価値を語り合う「旅の人」の役割を担い、それを契機として地域の先駆から多くの教えを受けることにより、地域復興には過去－現在－未来を共有するコミュニティの復興が何よりも求められていることを実感した。その詳細は以下の参考文献、次項から要点を記す。

齋藤友里恵編（2012a）『ワンドートラベラー山田湾まるごとスクール資料』

齋藤友里恵編（2012b）『ワンドートラベラー山田湾まるごとスクール記録集』

齋藤友里恵編（2013a）『第 2 回ワンドートラベラー山田湾まるごとスクール資料』

齋藤友里恵編（2013b）『第 2 回ワンドートラベラー山田湾まるごとスクール記録集』

- 齋藤友里恵編 (2014) 『山田湾まるごとスクールのしおり』
- 五十嵐聰江編 (2016a) 『第3回ワンダートラベラー山田湾まるごとスクール記録集』
- 五十嵐聰江編 (2016b) 『第4回山田湾まるごとスクール記録集』
- 五十嵐聰江編 (2017) 『北浜老人クラブ・山田湾まるごとスクール交流記録』
- 五十嵐聰江編 (2018) 『第5回山田湾まるごとスクール記録集』
- 五十嵐聰江編 (2019) 『第6回山田湾まるごとスクール記録集』

(1) 陸中・山田湾をフィールドとするパブリック・アーケオロジー事始め

「山田湾まるごとスクール」の第1回は手探りの状態であることから「三陸海岸大津波・鎮魂の旅」を謳う観光考古学から始めた。現地では緊急の文化財レスキューも目の当たりにすることになり、山田湾を語るには緊急レスキューされる新たな資料も重要であり、第2回以降には少し腰を据えて皆で学び合う姿勢へと転換し、「山田湾文化・復興の旅への誘い」とする企画を進めてきた。

(2) 山田史談会との「顔と顔を会わせる」交流事始め

海藻標本レスキュー支援に参加した縁で山田町生涯学習課所管の山田史談会や鯨と海の科学館との交流が開始した。特に山田史談会との「顔と顔を会わせる」交流は事務局川向聖子氏の計らいで仮設居酒屋の盛り上がりで再会を期すのが常である。早速2013年2月には第1回山田史談会＆「山田湾まるごとスクール」交流会が誕生し、その勢いに乗り時間を置かずに第2回は「古代の山田湾文化を知る！—貞觀三陸地震と山田湾—」とのテーマで同年6月に山田町民へ一般公開され、山田湾文化をテーマとした交流こそが相互理解を深め、復興への相互の寄り所として確かなものになった。

(3) 地域に学び、地域の成り立ちと共に考え、復興を模索する社会学的接近事始め

山田史談会会長（当時）川端弘行氏は船越半島の内湾漁業拠点である大浦地区ドック近隣に自宅があり、被災した関係で大浦仮設住宅に身を寄せていた。大浦仮設住宅の方々は代々漁業を生業しており、それは鯨と海の科学館に象徴されているが、商業捕鯨以前の大正時代の大浦入江はイルカ猟全盛で大いに潤った地域資源隆替史を教えられる等、優れた環境資源への高度な適応に山田湾文化の成り立ちを見直すと共に、生業の継続性によるコミュニティの復興にこそ山田湾文化の未来を見る。因みに縄文時代前期「大木2式」に大型住居址が多数遺存する背景としてイルカ猟の隆盛が髣髴とする。

(4) 陸中・山田湾をフィールドとするパブリック・アーケオロジーの学術基盤

最後に紹介するのは「川端弘行コレクション」との出会いとその後の交流である。川端氏の被災した自宅跡には従前収集した山田町畠中遺蹟等の土器・石器がレスキューされて小屋に収められていた。これを以後「川端弘行コレクション」と呼び、「山田湾文化」解明の手引きとすべく学術基盤として整備予定である。川向氏の協力を得、山田史談会と「山田湾まるごとスクール」参加者全員で土器片の整理を始め、小さな土器片でも多くの情報が記録されていること等を体感し、パブリック・アーケ

オロジーの象徴として活用中である。畠中遺蹟の土器・石器は縄文時代中期から晩期にかけての資料が殆どであるが、僅かに弥生時代後期も見られる等山田町の拠点遺蹟に位置付けられる。しかも畠中遺蹟の山田湾対面低地の浜川目沢田Ⅰ遺蹟からは津波層が検出され、俄かに縄文三陸津波研究を深耕すると共に、パブリック・アーケオロジーの学術基盤として年代特定の高度化が求められる。

3. 縄文三陸津波研究

(1) 縄文時代中期津波の考古年代

縄文三陸地震津波の考古学的研究は、相原淳一が先鞭をつけた。宮城県域における縄文時代遺跡の消長を丁寧に辿ることにより、津波堆積物研究が提示していた（今泉ほか 2010）、

- | | | |
|-------------------|-------------------|-------------------|
| ① 5450-5350 calBP | ② 5000-4900 calBP | ③ 4300-4200 calBP |
| ④ 3800-3650 calBP | ⑤ 3100 calBP | ⑥ 2500-2400 calBP |

の各津波イベントの、①を縄文時代前期中葉の大木 2a～2b 式期に、④を後期中葉の宮戸Ⅱ b 式期に、⑥を晩期末葉大洞 A' 式期に比定したのである（相原 2012）。理化学年代値を考古学の単位に置き換え、次いでその前後に焦点をあてて地域研究を展開する、という相原の方法に筆者らは学んでいる。

この時点において、縄文時代中期の津波はまだ明確でなかったが、該期の津波堆積物もすぐに宮古湾湾口で発見される（駒木野・相原 2014）。竪穴住居を直に覆い、覆土には「最花式土器の範疇で捉えられる」土器が含まれていて、②に相当するイベントが考古学で検証できる可能性が高まった。幸い、震災復興関連工事に先立って行われた発掘調査が、新しいデータを提供してくれた。筆者らが注目したのが、山田湾北岸で発見された岩手県下閉伊郡山田町浜川目沢田Ⅰ・Ⅱの両遺跡である（須原編 2018、北村編 2018）。

特に目立つのは、大木 8b 式の範疇に入らず、また大木 9 式に入れることのできない一群の土器である。この大木 8-9 式期の動向を抑えると、大木 8-9（古）・（新）式期には、海岸方に位置を少しづつずらしながら、住居の建替えを行っている。ところが、8-9（新）式期の 3 度目をもって建替えが止み、次の大木 9（古古）式の住居は、海岸から最も離れ、Ⅰ 遺跡で最も標高の高い地点に作られるのである（齋藤・鈴木 2021）。こうした動向は、近隣の遺跡のすべてで起こる現象でない。宮古湾に面する段丘上に営まれた岩手県宮古市磯鶴上村貝塚は、大きな変化もなく続く（小田野編 1992）。海浜低地と段丘上とで違いが生じるのは津波に起因するからであり、駒木野・相原発見の津波は大木 8-9（新）式期の発生と考えたい。

(2) 縄文時代後期津波の考古年代

相原は、④ 3800-3650 calBP イベントの考古年代を、縄文時代後期中葉の「宝ヶ峯式」後半辺りに比定する。ただし、この「「宝ヶ峯式」は、宮戸Ⅱ a 式、宮戸Ⅱ b 式（加曾利 B2 式・加曾利 B3 式）、西ノ浜式の 4 型式を含んでいる」（相原 2012：16 頁）と述べたように、年代のさらなる絞り込みが要請されていた。一方、近年の津波堆積物研究は、山田湾付近で 3.8Ka、3.5Ka、3.3Ka の 3 イベントを見て取る（高田ほか 2016）。したがって、複数回の発生を視野に検討を進める必要があるが、

ただし後期の場合、遺構の検出例は多くない。中期とは異なる方針を立てる必要があった。発表者らは、中期の項でもとりあげた浜川目沢田I遺跡の土器出土量に着目した。鈴木（2014）による三陸地方の後期土器編年をもとに、さらに1型式を加え、

門 前 → 宮戸I b → 南境／十腰内I → 崎山弁天1 → 崎山弁天2 → 崎山弁天3 →
→ 宝ヶ峯 → 宮戸II b → 浜川目沢田 → 西ノ浜（古）・（新） → 宮戸III a → 宮戸III b

の単位ごとに量を比較する。そして、【-：稀薄】【△：閑散】【□：定着】【○：盛行】【◎：最盛期】という5のレベルで量をそれぞれ評価すると、浜川目沢田I遺跡では、十腰内I式から崎山弁天1式にかけて「定着」しているものの、突如直後の2式に「稀薄」となる。その後再び増加に転じ、宮戸II b式期は「盛行」、浜川目沢田式期は「最盛期」と評価できるが、直後の西ノ浜（古）式で激減した。

この激減を、海浜集落生活者を襲った異変の反映を見てよいならば、異変は「稀薄」直前の後期前葉崎山弁天1式期と、浜川目沢田式期に起こったものと考えられる。同遺跡では後期とみられる津波堆積物も検出されており、異変を津波災害に置き換えて差し支えない。少なくとも2回の発生は考古データでも裏付けられる、というわけである。

（3）津波災害からの復旧・復興

筆者らの土器型式研究・集落研究では、中期に1回、後期に2回の津波発生をみてとった。このうち中期は、先にも述べたように遺構を検出しやすいのが幸いして、復旧・復興の様子を展望できる。山田湾岸・浜川目沢田I遺跡では、津波発生直後の大木9（古古）式に、海岸から最も遠く、最も標高の高い地点に住居が作られる。ところが低地での生活再建が芳しくなかったのか、この1軒を以て人類活動は中断し、高台の浜川目沢田II遺跡に生活の拠点を遷す。大木9（古）式以降、大木9-10式期まで安定した集落経営がみとめられる。

（4）地震災害からの復旧・復興

縄文時代中期における三陸地震津波の発生は、津波堆積物と考古データの両面から裏付けられる。この地震津波の規模を考えるうえで注目されるのは、福島県相馬市松川浦でも5000 calBPを前後するイベント堆積物が検出されている点である（今泉ほか2010）。これがもし同一の現象に因るにすれば、三陸-相馬間に地を占める仙台平野はもちろん大きな被害が出たであろう。

こうした視点から発表者らの関心を惹くのが、仙台市太白区上野遺跡である。仙台平野第I浜堤列まで約8kmを測り、津波の被害を受ける場所ではもちろんない。第6・7次調査の成果から中期地震津波前後の集落形成状況をみてみると（主浜ほか編2010）、住居跡は大木9式以後がほとんどで、8-9式以前は1例しかない。しかし、何も8-9式以前の土地利用が低調だったわけではなく、遺構はあって、決して遺物量も少くない。このアンバランスさで気に懸かるのは調査区中央の「溝状の落ち込み」で、廃棄場としての役割が想定されている。問題は「廃棄」のタイミングと意図である。

廃棄溝は、大木8-9式以前の土器を多く含む。わずかに大木9（古古）式があり、大木9（古）式

以降を欠くことから、大木9（古古）式までに埋まりきったとみてよい。ポイントは、出土品の位置の上下が、年代の新古と相關していない点である。混然とした出土状況は、様々な時期の土器があるタイミングで一括投棄されたことを示す。そのタイミングとは当然、大木9（古古）式期である。

中期地震津波の地震動が仙台平野にも大きな影響を及ぼしたとすれば、大木9（古古）式期は復興初期段階に相当する。そうして廃棄溝には大木8-9（新）式までの遺物が一括で投棄されていること、大木8-9（新）式以前の遺構は深く掘り込まれた施設のみ遺存していることを総合すると、整地して集落域を一掃し、溝を掘って災害廃棄物を処理した可能性を考えることができるであろう。

4. おわりに—山田湾における最古の津波遺跡を求めて—

- ①縄文時代中期に発生した三陸地震津波の考古年代は、大木8-9（新）式である。
- ②縄文時代後期に発生した三陸地震津波の考古年代は、崎山弁天1式と、浜川目沢田式である。崎山弁天1式は関東地方の加曾利B1式初頭に、浜川目沢田式は曾谷式に併行する。
- ③土器型式の細別は、地震津波の発生年代を絞り込むことだけにとどまらず、復興のあゆみの解明にも寄与する。三陸地方で確認される地震津波が仙台湾岸まで及んでいたとすれば、仙台市上野遺跡の検出状況は復興の1パターンとして理解することができる。
- ④津波は縄文時代前期にも発生した。その考古年代の特定が現在の課題である。

引用・参考文献

- 相原淳一 2012 「縄文・弥生時代における超巨大地震津波と社会・文化変動に関する予察—東日本大震災津波の地平から—」『東北歴史博物館研究紀要』第13号 pp.1-20 東北歴史博物館
- 五十嵐聰江（編） 2016a 『第3回ワンダートラベラー山田湾まるごとスクール記録集』 山田湾まるごとスクール事務局
- 五十嵐聰江（編） 2016b 『第4回山田湾まるごとスクール記録集』 山田湾まるごとスクール事務局
- 五十嵐聰江（編） 2017 『北浜老人クラブ・山田湾まるごとスクール交流記録』 山田湾まるごとスクール事務局
- 五十嵐聰江（編） 2018 『第5回山田湾まるごとスクール記録集』 山田湾まるごとスクール事務局
- 五十嵐聰江（編） 2019 『第6回山田湾まるごとスクール記録集』 山田湾まるごとスクール事務局
- 五十嵐聰江・齋藤友里恵 2015 「パブリック・アーケオロジーによる復興支援」『遺跡学研究』第12号 pp.97-104 日本遺跡学会
- 今泉俊文ほか 2010 「津波堆積物調査にもとづく地震発生履歴に関する研究」『宮城県沖地震における重点的調査観測（平成17-21年度）総括成果報告書』 pp.152-185 東北大学大学院理学研究科
- 小田野哲憲（編） 1992 『上村貝塚発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 北村忠昭（編） 2018 『浜川目沢田II遺跡発掘調査報告書—主要地方道重茂半島線地域連携道路整備事業関連遺跡発掘調査—』 岩手県文化振興事業団
- 駒木野智寛・相原淳一 2014 「岩手県における古津波堆積層と遺跡」『岩手考古学』第25号 pp.7-26 岩手考古学会
- 齋藤瑞穂 2013 「文化財レスキューネクスト・ステージを模索する—岩手県山田町で地元の郷土史研究会との交流研究集会を開催して—」『新潟史学』第70号 pp.53-58 新潟史学会
- 齋藤瑞穂・川端弘行 2016 「聞き取り調査にもとづく明治三陸地震津波被災範囲の復原—岩手県山田町

大浦を例に—』『2016 年前近代歴史地震史料研究会講演要旨集』 pp.3-5 前近代歴史地震史料研究会
齋藤瑞穂・鈴木正博 2020 「縄文三陸地震津波再々論—縄文時代後期の山田湾津波と復興—」『2020 年
前近代歴史地震史料研究会講演要旨集』 pp.1-7 前近代歴史地震史料研究会
齋藤瑞穂・鈴木正博 2021 「縄文三陸地震津波研究 (4) —被災した縄文集落のその後—」『2021 年歴史
地震史料研究会講演要旨集』 pp.1-5 歴史地震史料研究会
齋藤友里恵 (編) 2012a 『ワンダートラベラー山田湾まるごとスクール資料』新潟大学災害・復興科学研
究所危機管理・災害復興分野
齋藤友里恵 (編) 2012b 『ワンダートラベラー山田湾まるごとスクール記録集』新潟大学災害・復興科学
研究所危機管理・災害復興分野
齋藤友里恵 (編) 2013a 『第 2 回ワンダートラベラー山田湾まるごとスクール資料』新潟大学災害・復興
科学研究所危機管理・災害復興分野
齋藤友里恵 (編) 2013b 『第 2 回ワンダートラベラー山田湾まるごとスクール記録集』新潟大学災害・
復興科学研究所危機管理・災害復興分野
齋藤友里恵 (編) 2014 『山田湾まるごとスクールのしおり』新潟大学災害・復興科学研究所危機管理・
災害復興分野
主濱光朗ほか (編) 2010 『上野遺跡第 6・7 次発掘調査—都市計画道路「富沢山田線」関連遺跡発掘調
査報告書—』仙台市教育委員会
鈴木正博 2014 「「防災・減災考古学」から観た船越半島の縄文土器ガイド」『山田湾まるごとスクール
のしおり』 pp.29-39 新潟大学災害・復興科学研究所危機管理・災害復興分野
須原 拓 (編) 2018 『浜川目沢田 I 遺跡発掘調査報告書—大沢地区漁業集落防災機能強化事業関連遺跡
発掘調査—』岩手県文化振興事業団
高田圭太ほか 2016 「岩手県沿岸における津波堆積物の分布とその年代」『活断層・古地震研究報告』第
16 号 pp.1-52 産業技術総合研究所地質調査総合センター
保立道久 2016 「歴史学で過去のハザードと災害を知り、予知に貢献」『災害の軽減に貢献するための地
震火山観測研究』 p14 東京大学地震研究所・地震・火山噴火予知研究協議会

Abstract

Public Archaeology in Yamada Bay Area and the Study of Jomon Sanriku Tunamis

SAITO Mizuho · IGARASHI Satoe · TAKUMA Kiyokuni ·
YASUI Ken'ichi · SUZUKI Masahiro · SAITO Hiromichi

We will present the new prospect we have encountered in our interactions with the people of Yamada Town, Iwate Prefecture, since the Great East Japan Earthquake. In this presentation, we will narrow down the archaeological chronology of tsunamis that occurred during the Jomon period and show how humans responded during that time. The tsunamis occurred 3times in Daigi 8-9 intermediate stage, the Middle Jomon Period, Sakiyama-Benten 1st stage and Hamakawame-Sawada stage, the Late Jomon Period.